

『宿命』をめぐって (2) F. Mauriacの異教性 (4)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2024-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 公子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000838

『宿命』をめぐって(2) F.Mauriacの異教性(Ⅳ)

中 島 公 子

劇作『宿命』第3幕 翌日 朝八時頃

第1場 ボブ エリザベート

(全身白づくめの服装をしたボブ、ひとりでテラスの上を歩き回っている。立ち止まって空を見上げたところへ、部屋着姿のエリザベートが、髪を撫でつけながら窓の錠戸を開け、顔を出す)

ボブ

ああやっと！ ポールはどこです？ ランゴンまで、自動車で行ったんでしょうか？

エリザベート

ちょっと待って頂戴。いまそこへ行くわ。

(ボールの手紙を持って出て来る)

エリザベート

心配しないで。ね、あのひとは行かなくちゃならなくなったのよ。でも、二週間以上行ったままにはしないでしょよ。それにたぶん、この手紙のなかに全部説明してあるでしょうし。

ボブ(封筒を破り、さっと一読みして、訝しげにエリザベートを見、眉をしかめて、再び唇を動かしながら丁寧に読み返す)

どうして行ってしまったんだろう？ 何が起こったんだ？ 何かがあった

に違いない。どういうわけなんですか？

エリザベート

そんな顔をしないで頂戴。帰ってきますよ。あんた、娘たちってどういうものか、知ってるじゃないの。あのひとはひとりになって考えたかったんですよ。きっとあんた方、昨日少し行き過ぎたのじゃなくって？

ボブ

そのせいだと？ ああ、そのことなら、僕、心配はしません。愛撫くらい早く許されるものはありませんから。

(エリザベート、頬をあからめる。ボブはもう一度手紙を読み返す)

ボブ

違う、そんなことは有り得ない。僕はあのひを知っている。違う、そうじゃない。何か僕の知らない理由があるんだ。そしてあのひとも、ゆうべ扉の前でさよならを言ったときには、まだそのことを知らなかったんだ。僕は彼女の最後のことを覚えている。「どうしていっしょに明け方を待つことができないのかしら？」って言ってた。そこで僕がひばりについてちょっと駄洒落を言ったんだ、「暁でもなく、ひばりでもなく……」¹⁾って、ハミングで。

ゴルナック老人 (部屋のなかから大声で)

エリザベス！ (窓から顔を出して) 来てくれ！ おい、早く！ 上がって来い。座骨神経痛が起こったんだ。

エリザベート

驚きませんよ、わたしは。お天気が変わって来ましたからね。お舅^{とう}さんはほんとに晴雨計ですよ。

ゴルナック老人

雨が霰にならんといいが！

エリザベート

大丈夫ですよ、お舅^{とう}さん。大丈夫。そんなふう^{ふう}に外の空気に触れてはいけ

ませんよ。わたし、すぐ上がって行きますから。

(ゴルナック老人は窓を閉める)

エリザベート(ボブに)

朝ご飯がすんだらまた会いましょう。お舅^{とう}さんが寝ている間に。慌てて騒ぎを起こしてはだめよ。ポールはきっと帰ってきますから、ね。

(エリザベートは家に入り、ボブは地面を見つめながら去って行く。遠雷が聞こえる)暗転。

第2場 ピエール ボブ

(第1場から数十分経過したという設定。ピエールが黒っぽい服を着て首のまわりに襟巻をし、椅子に腰かけて本を読んでいる。ボブ、草の葉を噛みながら登場。ピエール、慌てて逃げようとする。しかし思い直して、近所の農夫に挨拶するように片手をあげて、ボブを見ずにその手を振る)

ボブ

帰省したのかい？

ピエール(うなずく。が、本から目をあげない)

ボブ

運が悪かったな、君は……。

ピエール

いや、降っても平気だよ。

ボブ

雨のことを言っているんじゃないよ……君が一日早く帰ってきたら、ヴィリディスで若い女性に会うことができたのに、という意味だよ。

ピエール

ド・ラ・セスクさんのことかい？ それなら僕は昨日の晩に会ったよ、というより、夜中に、ね。……じっさいの話が、明け方の2時まで起きて話し合っていたのさ。

(二人は、二匹の犬のように睨み合う)

ボブ (吐き捨てるように)

そんなことだろうと思った。

ピエール

とにかく僕たちは従兄妹同士だからな……。あれは聡明な女性だ。僕らと会話のできる珍しい娘の一人だね。

ボブ

それじゃ君たち、明け方の2時まで、シリアスな問題を論じ合ったというわけか？

ピエール (脚を組んで椅子に寄りかかり、片足で貧乏ゆすりをして)

君は好奇心が強すぎるよ。

ボブ

僕が君たちの問題に首を突っ込んでいる、とでも？ しかしそれは、首を突っ込んでいるのは、こっちではなくて、そっちの方じゃないのかな……。さあ、僕をまっすぐに見ろ。君はいつだってこそそそした目つきをしているぞ。

ピエール (飛び上がってベンチをひっくり返す。二人同時に喋り出す)

君のごとき輩^{やから}からそんな誹謗を受けるとは……！

ボブ

僕は他人を中傷するような偽善者^{タルチュフ}じゃあないんだ！

ピエール

へえ、中傷されるほどの人格者だとでも思ってるのか？

ボブ

おい、ド・ラ・セスクさんに、僕を悪く思わせるように仕向けなかったと言いつけるか？

ピエール

彼女が幾つか質問をしたのさ。僕はそれに答えただけだよ。

ボブ

何の権利があって？ 君は僕を知っているのか？ 僕の生き方について何を知っているんだ？

ピエール

誰も彼もが知っていることを、ね。

(ボブ、顔面蒼白になり、唇の端をわなわたと振るわせて沈黙する)

ピエール(それを見て自分が優勢に立ったと感じて)

それに、君は何も気に病む必要はないよ。僕はただ、ド・ラ・セスク嬢の乞いにまかせて、普通世間が君について取り沙汰していることを、繰り返したに過ぎないんだから。仕方なく自分を汚すことになったけれど、僕は、君に関して言われている別の忌まわしい所業²⁾を、だね。嘘だといひと僕も思っているが、そいつを暴露して若い女性の想像力を汚すことは差し控えたほうが良かったのかもしれないな。でも彼女が君について訊ねた相手がほかのひとだったら、彼らはきっと僕より慎み深くはないだろう……。

ボブ(ぐったりと欄干にもたれかかって、内面独白)

終わりだ、何もかも。彼女はもう帰らない。僕はあのひとを失ったのだ。(くずおれる)

ピエール(憐憫の情に駆られ)

泣くなよ……。生活をあらためるのに遅すぎるってことはないさ……僕の言うことを信じたまえ。大きな幸福が悩みを通してやってくるから。償いのつかない罪なんてないんだよ。僕はただ君の将来の幸せのためにやったんだ。乱暴な、赦されにくいやり方だったとは自分でも認めるよ。それについては君の赦しを乞うよ。(心のなかで) こいつ、なんて一生懸命に僕のいうことをきいているんだろう！ 僕はこいつに善行を施しているんだな。でも、なぜ黙っているんだ？(口に出して) 君、僕を信頼しないの？ 信じないのかい？(欄干にすがるボブに近づき、その手に触れようとす

る)君の手をくれよ。僕たちはもう敵同士じゃない。そして僕は君を助ける……そうだ、君が立ち直るために力を貸すよ……

ボブ (ピエールの湿った手の感触で我に返り、その手をさっと引きながら、初めて相手に気づいたかのようにピエールを見て)

こ、この野郎……

ピエール

そんな敵意をこめた目で見ないでくれよ。ゆうべだって、今だって、僕の話し方は乱暴かもしれないさ、でも君のために善かれと思ってしたことだから、ね。ねえ、君には魂があるんだよ。君のあわれな魂が！ きっとだれひとりとして君にそのことを告げた者はないのだろう？ その点、ほかの者たちよりも、君には多少なりと期待できるわけさ。ところで、僕は、ね、君の魂を愛しているんだよ。なぜって、さまざまな汚点^{しみ}があったとしても、それは美しく、輝いているからさ。僕が君の魂のためにどんなに嘆いているか、とても言い尽くせないよ。

ボブ (無言のまま、両眼をかつと見開き、あたかも眼で相手のことばを聞いているかのように、ピエールをまじまじとみつめる。それから、おそらくもっとよく聞くためかのように、ぐっと近づくと、突然拳を振り上げ、ピエールの顔面に一撃を喰らわせる)

ピエール (片方の鼻孔から血を噴き出し、唇が裂け、歯が一本折れた口もとをおさえながら、テラスの階段を転げ落ち、そのまま延びてしまう)

ボブ (ポールの手紙を握りしめて、その横を駆け下り、舞台の前面に出て、)

そうだ、何もかも、だめになったわけじゃない。帰ってくるさ、あのひとは。否定だ、否定することだ……ポール！ ポール！ ポール！！

(絶叫とともにその場を走り去る) 幕。

劇作『宿命』第3幕終わる

その後のあらすじ(1) ボブの死まで

手法の転換

これから以後の小説『宿命』の展開は、厳密に古典劇の形式にはあてはまらないが、演劇的であることに変わりはない。すなわち舞台は一貫してボブの祖母マリアの住むラガーヴ家とエリザベートが舅とともに住むゴルナック家を道路の両側に備えたヴィリディスと呼ばれるガスコーニュ・ランド地方の一区域であり、そこに登場する人物はこれまでのところに登場した人々に限られ、劇作『宿命』の3幕目以後に、彼らの運命がどのように変わって行ったか——と言っても、物理的な変化の大きなものは、ロベルト(ボブ)・ラガーヴの交通事故死のみであって、その出来事も彼の父親の書簡によって伝えられる形をとっているが——限られた空間の限られた場所で起こる出来事にその都度スポットライトがあたり、出来事の意味やその関連性を引き出す作者は、脚本家や演出家同様、舞台の背後に隠れている。

だが、強いて言えば、そうした作者自身の「語り narrative」と見られる個所が、劇作個所よりも少し前面に顔を出してくるようにも思えるので、そのことからすると、以後の手法は、舞台演劇よりも、ナレーションや字幕を取録した「映画」や「テレビ・ドラマ」に、より近くなっている、ということができる。さらに、劇作の部分でもじつは大きな効果を担っていたにもかかわらず、稿者が無理に捨棄してしまっていた「天候」「温度」「湿度」とそれに伴う樹木や鳥獣の鳴き声まで含んだ自然現象そのものの描写は、映像芸術によらなくては転換できないものだと言えよう。

F. モーリヤックは1920年代を代表するフランス作家の一人として、映画の手法に強い関心を示し、『テレーズ・デスケルー』におけるフレッシュ・バックのように、それを積極的に自作に取り入れた作家である。『宿命』が古典劇の手法をはなれて映画的手法に近づくのには、それなりの必然性があったと考えられる。だが、ここはまだ小説におけるテーマと手法の相関関

係を論じる段階ではないので、その問題はのちにゆずり、とにかく、小説そのもののその後の展開を追うことにしよう。

手紙、手紙、返事のない手紙、そして待ち人でない訪れ

雷鳴が轟き、大粒の雨の降りしきる中、葡萄畑にうずくまって、ボブは何度もポールの手紙を読み返した。自分の過ごしてきた二十三年の人生を振り返り、そこにあった或る行為がポールに驚愕と恐怖を与え、彼のそばから退かせることになるかもしれない、ということを確認する一方、なぜ人間は過去の行為にそれほど悩まされなくてはならないのか、しかもそうした行為のうち、自分がほんとうに欲して行ったことがどれほどあるか、ともボブは思う。生まれついた美貌のゆえに、この少年は物心ついたときから、周囲を囲む貪婪さと色情の物言わぬ大渦に巻き込まれていた。さりげなく挿入された作者のナレーションを借りれば、「人食い鬼の森に迷い込んだ一寸法師」だったのである。道を選んだのは彼ではない。他の連中だ。「人間どもの間にまぎれこんだ天使」に、強いられた行為の痕跡はどのくらい残っているのだろうか？

ボブはポールに手紙を書こう、と思う。「僕は何もしなかったし、またすべてをしたのです。——けれど、それがどうしたのでしょうか？ 僕たちのような愛はすべてを覆うものではありませんか。上げてきた潮が引かずに広がっていくように……」

それから彼は、草の上に延びてしまったピエールのことを思い出して笑い出す。今頃息を吹き返しているかもしれない。どうしてあいつを殺してしまわなかったのだろうか？「殺していたら？ 言うことなかったのに」と声に出して言う。

もう一度ポールの手紙を読み返す。彼女は物事を考えるために二週間の猶予を求めている。彼女は彼を愛している。帰ってくるだろう。

「ポール！」耳を聳する雨音に負けじとばかり、ボブは叫ぶ。そして自分

の体がまだ回復期にあることに気が付き、祖母の家に向かって走り込む。

祖母は珍しく外出している。そしてその理由を記したエリザベートの手紙——ゴルナック爺さんが心臓発作を起こし、しきりとマリアに来て欲しがっていることを記した手紙を発見する。末尾に、ピエールがテラスの階段から転げ落ちて顔に怪我をしたが、ボブに、心配するなと伝えてくれ、と言ったとも書いてあった。

マリアはボブに宛てたエリザベートの手紙を携えて、じきに戻って来た。「私は今回、手紙を書きました。誰にだか、あなたにはわかるでしょう。あなたも手紙を書いたらいいと思っています……」

言われなくとも書くつもりだったボブは、寝室にこもって仕事にかかる。しかし何を、どう書いたらいいのか？ ピエールとの経緯を詳細に記す以外に彼は何も書かない。ポールはボブの隠れた生活を知りたがっているのだが、それは彼を試し、罰するためだ。そしてボブは試されたり、罰せられたりすることは嫌いな人間だった。だからこういう手紙しか自分には書けない。これでポールが返事を寄こさなかったら、彼女の帰りを期待するのはばかげているし、もう二度と彼女に会うことはないのだ、とボブは自分に言い聞かせた（後に、ポールはこの手紙に返事をしなかったことを深く悔やむことになる）。

日々が過ぎる。窓のそとに自動車の音が聞こえるのをひたすら待つだけの日々だ。ボブはランゴンでコニャックを三本買いこんできて、それをほとんど空にする。ぐでんぐでんになり、蠅のむらがる木陰にひっくり返って、鼻歌を歌う、独り言をつぶやく。することがないので、絵を（こどもっぽい絵や猥褻な絵を）書いて、自分に見せる。そして誰一人として彼を慰めに来てくれる者がいないのにびっくりする。

「可哀そうなボブ！ 可哀そうな子！」と自分に囁く。

そのうち、愛する者への激しい怒りに襲われることも一度ならずあった。「彼女に蒙った痛手から、僕が立ち直れないとでも思っているのか、あのバ

カ女!」

彼は計画を立て、あれこれの知り合いに声をかけることにした。そうだ! 死ぬのもくたばるのもいいが、その前に残された時間をまずは利用することだ。そして酔っ払い特有の空想による会話力を使って、大声でしゃべった。「僕の評判が落ちるって? いいとも。落ちるだけ落ちるがいいさ。僕はそれを利用するね。君たちは確かに見たいものを見るだろうよ。とことん悪事に首を突っ込むとはどういうことか、わかるだろうよ。そんなことは僕にとってはいしたくないことじゃないんだ。むしろ自慢の種なんだよ……」

「ボブ、あんた、誰に向かってしゃべってるの?」

という声に身を起こしたボブの目に、戸口に立つエリザベートの姿が映る。「なんてまあ、ここは暗いでしょう! 寝ていたの? 可哀そうに、夢をみていたのね。あたし、来ずにいられなかったのよ。手紙、来た? まだ? 気にしなくても大丈夫よ。あたしにも返事を寄こさないんだから。二、三日中にはきっと帰ってきますよ。どこであなたはあのひとに会えるのかしら。ここかも、ね。マリアはずっと、うちに来てるから。そうなればあなた方、道端でも、葡萄畑の中でも、いつでも会えることになるわ……どうしてそんな変な顔をしてるの? ボブ、なぜそんなにあたしをみつめているの? 口もきかないで……」

ボブは起き上がっていた。シャツの片袖だけ羽織っているように見えた。しかし窓の錠戸が閉まっているので、光がはいってこない。

「窓をあけましょうか」とエリザベートは言った。

「いや、開けないで。暑さがはいりこむから。さ、ここへきて、僕のそばに、ベッドに座れよ、ゴルナックさん」

「あたしはちょっと寄っただけですよ。腰掛けている暇はないのよ。それにしてもボブ、変な声をしてるわね。可哀そうに、まだ目が醒めないのね」

「冗談じゃない。眠くなんか、あるもんか。眠くない証拠をみせてやるよ」

彼女はほとんど叫ぶ暇もなかった。「何をするの? あんた!」

彼女は突然荒々しく抱きすくめられたのを感じたのである。そして顔に、アルコール臭い生暖かい息がかかった。しかしボブはふらふら立っていたので、一振りで彼女は身を振りほどき、寝台の上に男を突きもどした。仰向けに延びたまま、彼は彼女を見てへらへらと笑った。ゴルナック夫人は手をドアの掛金にかけ、振り向いて、言った「あなたを責めるつもりはないわ。酔っばらっているんだから」。

それに対して、男は無頼漢めいた口調で、「またとないチャンスだよ、ものにしたほうがいいのになあ……。あんた、あとで悔やむぜ」と言った。

憤然とした嘆声でそれに答え、彼女はドアをびしゃりと閉めた。並木道を走り去る足音がボブの耳にとどいた。

「俺が追っかけて行くとでも思ってるのかい！」

そう言って、彼はひとりで笑った。エリザベートは道を突っ切り、家にはいり、寝室に行き、ドアに門をかけて、ベッドに身を投げ、ようやく泣いた。

ボブ攫われる

ポールが去ってからもう十八日目だ。ボブはポールを傷つけることばかり考えていた。「今度はこっちが君を苦しめてやる」。それはさぞかしいい心持ちだろう。彼女はやって来さえすればいい。そうしたら彼女に戸口を指し示してやるのだ。ボブはこうした復讐心にすがって、家中にあるアルコール飲料を消費しながら、自動車の音を待ち続けた。

珍しく熟睡した翌朝早く、モーターの唸りがボブを目覚めさせた。しかし、それは彼にとっては関心のない高馬力の車の音だったので、彼はまた目をとじた。だが唸り声は去ってはいかず、何時までも続いた。それに交じって、何やら聞きなれた声がある。ボブは外に飛び出した。マスクをした人々が車から降りてボブを呼んだ。

マリア・ラガーヴも何事かを見に出て来た。孫のボブがパリで交わってい

るらしい、恐ろしい者どもだ。二人の男と二人の女である。マリアの知らない外国人たちの噂をしながら、家に近づいてくる。彼ら自身、ルーマニアの王女を「プリンセス」と呼んで仕える移民たちであり、ユダヤ系アメリカ人も含めパリのヴァノー街周辺にたむろする外国籍のブルジョワたちなのである。孫にインテリアの仕事をさせてくれているのがこうした人々であることは、ランドの土に根を生やした田舎者のマリアには想像もつかない。ボブは彼らが酒類ばかりでなく、カクテルをつくる道具一式を運んできたことに大喜びして、ゴルナック家から氷とレモンをかすめてくる。彼らは「ピーター・パン」と呼ばれる蓄音機を取り出して、“Sometimes I'm happy”と
いったジャズのレコードをかけた。

「あなた、もう四杯も飲んでよ。ボブ、いい加減にしたら？」

「あなたたちが行ってしまうと、もうカクテルとはお別れだからですよ」

「じゃ、あなたもわたしたちといっしょにいらっしゃいよ！」

「そうだとも。君を連れていけない手はないよ、ねえ、そうなりゃ素敵だ……ほら、覚えているかい？ いつかの夜さ、〈ステーキ・ハウス〉を出てからルーアンへ行ったじゃないか、夜中の二時に。しかもスモーキングに夜会靴といういでたちでさ。……」

「そうだよ！ そうしたまえ、ボブ。ドーヴィルの方がこんな田舎より君には合っているよ。僕には君のことがわかる。君は快樂がないと死んじまう質^{たち}の人間だよ」

「カクテルをもう一杯くれたまえ。そうしたら、君たちについて行くよ……
そしてもし君の言うことをそのまま受け取るとしたら？ これは逃亡だな。
どこか、あっちへの、逃亡だ！……」

もう一枚レコードが軋った。マリアは椅子がひっくり返る音を聞いた。ボブが叫んだ。

「ちょっと待っててくれ。いずれにせよ鞆が要るから。化粧箱も、だ」

ポールの来訪

ボブが突然ヴィリディスから消えてなくなったことは、マリアからすぐにエリザベートに伝わったが、彼女に格別の感情は湧かなかった。ただ神に向かって、「この場所を清めてくださり、わたしからあの有害な人物を取り除いてくださったことを感謝」する以外には、何も感じない。そう自分では思っていた。

ゴルナック老人の容態は回復し、ボブが来る以前の平穏な生活がもどってきていた。ただ、砂漠の聖人と言われるシャルル・ド・フーコー³⁾についての論文に熱中するピエールの説教じみた話にいらいらさせられるたび、エリザベートは、ボブはいまどこにいるのだろう、と思い、「せっかくのチャンスだ、掴んだ方がいいのに」と言ったあのしゃがれ声が聞こえてくるような気がして、ひとりでかぶりを振った。窓を開けて、息子と二人、もうじき葡萄畑の後ろに隠れようとしている夕日に赤く包まれる牛の群れを見ていると、彼女はまるで砂漠にたった独りでいるような気がするのだった。

ボブがいなくなったと知っても感情を動かされないことをひどく喜んだ日の翌日の午後四時頃、ポール・ド・ラ・セスクの自動車が彼女の家の玄関に横づけになった。エリザベートは、自分自身は戦慄せずに受け取れた知らせをポールに語るには声が震えた。心臓は、若い娘のそれと同じくらい早く打った。娘を客間に招じ入れると、早くも相手に釈明を求め、約束を破ったことを責めた。なぜこんなに遅くなったのか？ せめてはがき一枚でも寄せれば、あの子は辛抱することができただろうに！ 彼を絶望させるために、わざとやったのだろう。今どこにいるのか、わかるものか。とんでもない連中がやってきて、どこかへ彼を攫って行ってしまったのだ。もういないのだ、彼は。

ポールは、何も答えず立ったまま、ぶすっとして、両腕をぶらぶら揺すっていたが、

「あたくし、パリからの調査書を何通か待っていましたのよ」と、ようやく

口を開いた。「その最後の一通はやっと昨日届いたんです」

エリザベートは肩をすくめた。素行調査なんかして、何になるのか？ しかしポールは、自分は何も後悔していない、と言り返した。最悪の事態を覚悟していたにも拘わらず、受け取った情報は、懸念をはるかに超えるものだった。自分はいつぞやピエールに対して不当だった。そしてそのことを息子さんに伝えてほしい、とポールはゴルナック夫人に頼んだ。そう、ぎりぎりのところで、彼は彼女を救ってくれたのだ。

「救ってくれたって？ でも、まあ、あなた、こうしてやっぱり帰っていらしたじゃありませんか……もっとも遅すぎはしましたけれど、とにかく、こうしてここに来ていらっしゃるじゃありませんか」

空が曇って来た。丘には雨が降り出していた。暗くなった客間で、二人の女は、何も得るものなしに、相手を探り合ったが、

「ええ、帰ってきましたわ」と、夕陽を背にして座ってたポールが言った「帰ってきたのは、彼を諦めきれないからですわ」。

「どういうことですか？ お嬢さん、わたしにはわかりかねますけれど」

「それは奥様が、あたくしとは違う時代の方だからですわ。あたくし自身、あなた方の持つ偏見から自由になるのはたいへんでした。あたくしもそれを母から受け継いでいましたから。アルカションでお友達になった或る女性の助けがなかったら、はたして克服できましたかどうか……」

少女はためらいがちに、そのくせちょっとふざけた調子で語っていた。

「ひとりの青年を、結婚相手としてふさわしくないからって、なぜあきらめなくてはならないのかしら？……結婚と恋愛は別物じゃないの……」

「まあ、あなた、そんなこと言って恥ずかしくないんですか？ そんな碌でもない考えを、弁護なさってはいけませんよ」

「思っていることを申し上げたまでですわ。奥様」

「まさか、そんなことをボブにプロポーズするためにいらしたんじゃないでしょうね？ そうだとしたら、わたしはあの子がいなくなったのを喜びます

よ。あの子はあなたを賛美してばかりいましたもの。その最後の幻まで失ってしまうのは、可哀そう過ぎます。あの子の笑い声が聞こえてくるようですわ、“僕があんなに崇めていた娘は、ほかの娘たち以下だったんだ！”って」

「あらまあ！ あたくしの方があなたよりも彼をよく知っていますわ。あたくしが〈解放された女性〉だと知ったら、彼はきっと嬉しがりですよ」

「でも、わたしはこう思いますね。あの子はあなたのなかに、きっと自分では気づかずに、或る純潔さとか、清楚さといったものを愛していたんだと……」

娘はつと立ち上がり、手袋をはめた。二人ともそのとき、雨が降り出しているのに気づき、湿った土の匂いを嗅いだ。

「夕立がすむまでお待ちになりませんか？」

「車に入れば大丈夫ですから……もし彼から何か便りがありましたら、また、彼が帰って来ましたら、奥様、そのときは、お知らせくださいますね？」

「いいえ、それは、あなた、当てになさらないでくださいまし……^{いいなづけ}許婚者同士のお味方ならできたのですけれど……、いま聞いたようなご関係にわたし、手は貸しませんよ……どうしてお笑いになるの？」

「だってこの前ここへお邪魔したときは、そんな〈四角四面〉なことはおっしゃらなかったのですもの。恋の裏表をよくご存じの方のようにお話ししてたわ」

エリザベートは相手の腕を掴んで、正面を向かせた。

「あなた、何をあてこすってるの？」

「あら、何も、奥様。あなたのことはご立派だと思っ
ていましてよ。あなたはこの一件の初めから終わりまで、称賛に値する公明正大さをお示しになりましたわ。ご自分の得になることをなさったと責めることは誰にもできませんわ。でもね……でも……」

「でも、何ですか？」

「では申しますけれど、奥様、あなたのご年配では、公明正大さだけが恋の唯一の表現の仕方なのだと、あたくしは思います」

エリザベートは顔色を変え、やっと、こう言った。

「あなた、どうかしてるわ？ お願い、出て行って頂戴……」

そして、玄関の扉を開けた。

ポール・ド・ラ・セスクはひとことの詫びもしなかった。彼女は長い間、この老女に叩きつけてやりたくて、死ぬほどの思いをしてきた肩の荷をやっとおろしたのだった。ボブを見つけるのは難しくあるまい。パリの住所宛に手紙をだせば、どこへでも回送されるだろう……。

女二人は別れの挨拶さえほとんどしなかった。

これに続く数日間は雨だった。エリザベートは何の知らせも受けなかった。或る夜、人々がぬかるみに足をとられながら、転覆して火焰に包まれる一台の自動車に向かって走り寄る光景も、彼女の心の眼には届かなかった。動物じみた唸り声も聞こえず、燃える車の炎に照らし出される傷だらけの血みどろな身体、ゆがんだ顔、黒焦げになった手なども、彼女には見えていなかった。

その後のあらすじ (2) ボブの死以後

手紙、葬式、遺骸の到着

マリア・ラガーヴにボブの死を知らせて来たのは、パリにいる彼の父親オーギュスタン・ラガーヴである。ゴルナック家を訪れたマリアからその手紙を手渡されたエリザベートは、「まあ、なんて恐ろしい！」と叫んだあと、ピエールにそれを音読するよう、命じた。それによれば、ボブの運転する自動車は時速120キロメートルのスピードを出して、遮断機が下りているのに気づかず踏切を突破し、事故に至ったとのことで、彼の半分焼けた死体は鉛

の棺に納められて、近郊の教会でごく内輪の葬儀をすませたのち、埋葬のために次の木曜日の夕刻までにヴィリディスに運ばれる、ということだった。

読み終えてピエールは「こういう急死はおそろしいことですね。彼には罪を悔い改める暇もなかったのですから。僕たちはたくさん、彼のために祈らなくてはなりませんね」と言った。

それから彼は指をポキポキ鳴らしながら、外へ出て、そここを歩き回った。良心の呵責が眩きをはじめていた。「もし僕が口を出さなかったら、ラガーヴの奴もここを去らなかつたら。今でも生きていられたのだ。僕はあいつの死に責任がある。告解もできなかった死に、だ」。

家に戻って見ると、エリザベートがひとり取り残されていた。両手を膝において腰かけ、身動きもせずにいる。ピエールは再び歩き回りながら言った。「ママン、あなたは僕に責任があると思うでしょう？ こんな重荷を背負っていくのは恐ろしいことですよ、ね！ もちろん、意図がどうであったか、は重要です。僕の意図は正しかった。少なくとももうわべはそうだった。でも、あのラガーヴの奴が何時も僕の日障りの種だったことも確かです。きっと大切なのは、あの娘さんに事実をはっきり知らせることだったのですよ。それは義務でもありました。母さん、あなたは何も答えてくれないんだな。僕を責めてるの？」

「責めてなんかいないよ」と、彼女は答えて、両手を膝にこすりつけた。ピエールはまだまだ歩き続け、ボブの魂のために話し続け、最後にこう言った。「気の毒だなあ！ 九月にはいつてからの今朝みたいな日、聖フランシスコ・ザヴィエル教会なんかでの葬式がどんなだったか、想像できるよ……」

彼の想像では、聖堂は空っぽで、神父たちは早く式を終わらせたくて、そそくさと動いていたはずだった。オーギュスタン・ラガーヴも、そうした人けの少ない光景を予想し、パリにいる同僚や上司の官僚を呼び込んでいたのだった。

ところが案に相違して、葬式が始まる何時間も前から、花輪や花束が溢れ

んばかりに届けられたのには、彼も仰天した。ほぼその全てが薔薇で、しかもありとあらゆる種類が集まっていた。それらはまず棺を覆い、ついで玄関口に溢れた。それでもまだ持ち込まれるので、教会の壁沿いに並べられ、街路と溝の塵埃にしおれることとなった。B 葬儀社の社長はこのことを前もって知らされていなかったのに憤慨し、あわてて陳列用の車をとりに行った。これらの供物には、ほとんど送り主の名札がついていなかった。

「あの子はなんて愛されていたんでしょう！」と、母親のオルタンス・ラガーヴは涙とともに思った。しかし敢えて夫にはそう言わなかった。オーギュスタンは青ざめていた。そしてその花々の醸し出す臭気のために、死骸によるよりもっと気分が悪くなっていた。彼にとっては、ひとりの不幸な青年が諸々の悪を堪能するほど味わうことと、一つの純粋な愛について知ることとを同時に学んだあの未知の世界から吹いてくる風の、彼が吸わなくてはならない最後のひと吹きなのであった。参列者の行列が進む中で、ひとりの女の声が聞こえた。「たしかにあの人は女優のようだったわ！」

多くの会衆はオーギュスタンが見たこともない人々で、彼らは通り過ぎながら軽く会釈するだけだった。他の多くは、家族の前を通らずに去っていった。

「何を考えているんですか、母さん？」とピエールが言った。エリザベトはびくりとして立ち上がった。

「別に何も……。何か言っていたわね。そう、そう！ あなたは良心にしたがって行動したのよ」

彼女の声の調子は何も表してはいなかった。ピエールが教会へ行こう、と誘うと、異議も唱えず身支度をして息子に従った。だが帰りにマリアのもとへ寄ろうと息子が言うと、彼女は彼がびっくりするほど頑強にそれを拒んだ。

夜が来た。ゴルナック家の人々はそれぞれ部屋に引き上げた。エリザベトは寝室の扉に錠をおろしてからも、舅や息子の面前でと同じく平静だった。

た。彼女は窓に近づき、大声で言ってみた。

「彼は死んだ……」

しかしこのことばは彼女の中に何の反響も呼び起こさなかった。今度は衣装箆の鏡に、自分の青ざめた、凡庸な、太った女の顔を映し、それに向かってもう一度言ってみた。

「でも、彼は死んだのよ。死んだのよ。死んでしまったのよ」

彼女は祈りも唱えず、暗闇に横たわった。いったん眠気が襲ったが、また目がさめて、ボブに言った「彼女はほかの娘たちより優れてはいないわよ、ね！　そして、あなたとは結婚しないわ！」。

それから、にやりと笑った。自分は眠っているのだ、と思った。しかし木の葉の触れ合う音や草原の絶え間ない囁きは、彼女の耳を去らなかった。

次の日の九時頃、遺体が到着して、ランゴンの教会に安置された、と知らされた。ヴィリデイスでは儀式抜きで埋葬となるだろう。

「誰の遺体だって？」

「エッ、母さん、ボブのだよ……」

「ボブの遺体？」

ピエールは母親の顔を両手で包み、まじまじと見つめて、言った。

「何を考えてるの、ママン？」

「別になんにも……」

「ほんやりしてるんだなあ。聞いてよ、僕たち、お棺のそばへ行って、お祈りするのがいいってことになったんですよ。オーギュスタンさんの奥さんはお棺のそばを離れないらしいんだ。それから帰り道にマリアのところへ寄るんですよ」

ピエールは突然あらゆる心配事から解放されたかのような、奇妙な快活さを見せていた。馬車が来て、母と並んで席を占めるやいなや、彼は急きこんで話し出した。「いい知らせがあるんだよ。僕はそれを聞いてすごく嬉し

かったんだけど、母さんもきっと嬉しいと思うな……ええ、オーギュスタン・ラガーヴから聞いたんだけど、あの人は別にそれを重大なこととは思っていないみたいだったな……。いいですか、ロベールはその場では死ななかつたのです」

「死ななかつた？」

「二時間以上も臨終の床についていたんだって。そして自分が死んでいくことがわかつたんだって。息を引き取る十五分前に、意識がもどつたんだそうです。事故現場から一番近い家にかつぎ込まれていたんだけど、ね……その家が何だつたと思います？ 司祭館だつたんですよ、偶然にも！ 彼は貧しい田舎司祭の腕に抱かれて死んだのです。その司祭が両親に宛てて、素晴らしい手紙を書いて寄こしたのを、オーギュスタンが見せてくれましたよ。中にこんな文句がありました。“ご子息は改悛と信仰の深い感情を持って……苦しみかつ死に赴くのをよろこばれ、魂を神の手にゆだねられたのです……”」

彼はエリザベートの手をとつたが、彼女が身動きもしないので、その唇を見ると、かすかに動いているようだった。お祈りをしているのだと思つた息子は、黙つたままの母親を連れて教会へ向かつた。馬車は陰気な荒野を通つた。ひとりの住民が永久に去つてしまつたこの虚ろな海底は、はてしなく広がるかに見えた。馬はガロンヌ河の橋を渡つた。橋の向こうにランゴンの教会があつた。「馬を木陰につないでお置き」とゴルナック夫人はいつものように言つた。ピエールは馬車を下りた母親の腕をとり、「右側の通路ですよ……」と言つた。

黒い布に覆われた長いものが、二台くつつけた長テーブルの上に横たわつている、そのすぐ傍らで、喪服姿の人影、つまり母親が、額を膝にくつければばかりに身をかがめた。さっさと跪いていたピエールは、エリザベートが椅子の背を両手で握り、下顎をちょっとあけて、立つたままで見つて驚いた。

そして不意に、はげしい喘ぎ声があがり、延々と続くのを聞いた。そして母親が、頭のてっぺんから足の先までがたがたと震え、肩を波打たせて、しゃくりあげ、息を切らせるのを見た。ついにはその体が斧でむごく叩きのめされたかのように、椅子にくずれ落ちるのが見えた。人けない聖堂にその重苦しい嗚咽のこだまが響いた。彼女は涙に浸された顔を拭おうともしない一方、濡れた手で、額の上の髪をきちんとした分け目をかき乱した。それによってだらりと垂れ下がったひと房の灰色の髪は、彼女をだらしなく、みっともなく見せた。ピエールは入り口を盗み見たが、ありがたいことに聖堂には、死体とそれを見守る身をかがめた例の人影のほかにはだれもいなかった。とはいえ、いつ何時ひとが入って来ないものでもない。「さあ、母さん、ここにいるのは止しましょう」と息子は呼びかけたが、母親は棺の方へ半ば両の手を差し出して、わけのわからないことばを切れ切れに、どもりながら死骸に投げかけるばかりだった。「そこにいるのね、あなた！ そこにいるのね！」

エリザベートは生まれてこの方、今日までに流した涙よりも余計の涙をこの数分間に流し、幾分か平静になった。ピエールは外に出て、マダムは少し気分が悪くなられた、と御者に告げておいてから、母親のもとへ戻り、聖水に浸したハンケチで彼女の眼を拭ってやったのちに、連れ出して馬車に押し込んだ。

馬車の中でも、彼女はわけのわからないことを呟いていた。「あの日あたしに差し伸べたあの両腕……」ピエールにはそのことばが聞き取れなかったので、「われわれは肉体の復活を信じていますよ」と言うと、苦しみにゆがんだ顔は振り向いて言った「おまえの説教はもうたくさん」。そしてまた唸るように、こうも言った。

「お前を見ると恥ずかしくなる！ どんなにわたしが恥ずかしいか、お前がわかったら……」

数日後、ヴィリディスでの埋葬式が済んでも、彼女は墓場までは行かず

に、ボブの母親といっしょにいた方がいい、とピエールに言われたので、エリザベートはそうすることにした。母親が平静にもどったように見えたから、ピエールは思い切って、言いたくてたまらなかった話題に触れた。昨日、ド・ラ・セスク嬢に手紙を書いたと打ち明けたのである。もしも彼女がパリの新聞を読んでいなければ、あの事件について何も知らないでいるということもあり得るから……エリザベートは突然怒りを爆発させた。どうしてお前は他人の生活に干渉するのか？ その結果何が起こるのか、まだわからないのか？

「お前があの娘にここへ来るように手紙を出したというのなら、わたしは言っておくけど、あの娘には戸口を指さしてやるだけです。あの娘のおかげで、あの子は死んだのです。だからわたしはあの娘を家に入れるわけにはいかないのよ……」

「でも、ママン、それは僕が……」

「あの娘は、ね。何も行ってしまふことはなかったのよ。そして一度行ってしまったからと言って、また帰ってくることはできたはずですよ……そりゃ、もちろんお前にも、責任はありますよ！ それにわたしだって！ あの朝早く起きてボブに、あのばか娘を出て行かせないように注意してやることは十分できたはずなのに……なのにわたしは、眠って、眠って、あんなに眠ったことはないぐらい、眠ってしまった」

それだけ言うと泣き出したエリザベートに向かって、ピエールは神の摂理を持ち出し、小ラガーヴのキリスト教徒としての臨終をよく考えるように、母に説いた。すると母は叫んだ。

「神様がお前にその確信をお与えくださったって？ わたしたちにわかっていることはひとつしかないわ。それはあの子の身体が土の下で、だんだんと朽ち果てて行って、もう誰もそれを見ることもできなけりゃ、触ることもできないってということだけです。そのほかのことはみんな……」

「母さん、そんな神様を冒瀆するようなことを、あなたが言うなんて！ ま

るでお祖父さんみたいなことを、あなたが……」

「冒瀆なんかしていませんよ！ あたしにはもう何にもわからない……ただあたしが苦しんでいるってことだけはわかっているけれど」そして、彼女は声を潜めて繰り返した。「あたし、苦しいの……苦しいのよ……」

ピエールはそれでもド・ラ・セスク嬢にヴィリデイスへ来るのは止めてほしい、という電報を書いた。翌朝、郵便局が開いたらすぐに出してもらうように手配した。そして客間にもどってみると、母はうとうとしているようだった。夜の祈りをいっしょに唱えないか、と誘ったが、エリザベートは黙ってかぶりを振った。それで少し遠のいて、椅子に両肘をついて頭を抱え、跪いて祈り、立ち上がったときには、母親はお休みも言わずに寝室に引き上げたあとだった。

あくる朝、彼が濃い朝靄について早朝のミサに出てもどってくると、一台の自動車が家の前に停まっていた。ポール・ド・ラ・セスクが来ている。電報は届かなかったのだ。ピエールは母の脅しを思いだして背筋が寒くなった。玄関の扉を開けたが、入って行く勇気が出ず、外から客間の半開きの窓に近づいた。話し声はしていない。そっとのぞき込むと、ポールは窓に背を向け、椅子の袖に腰かけて、頭をエリザベートの首に倚りかからせていた。ピエールは、母の手が娘の剃り上げたうなじを愛撫するのを見守った。もう一方の手は、あたかも何かの痕跡を探すかのように、娘の長い首筋やむき出しの腕に触れていた。ラガーヴ青年が、そのために生き、そのために死んでいったその肉体を、彼女はいま自分の腕に抱えているのだった。かの青年の唇はこの手やこの手首を滑り、肘の内側でちょっとたゆたいもしたのだろう。おそらくエリザベートはこの肉体の上に何かの痕跡を見つけ出したいという漠とした欲望を感じていたのだ。ちょうど旅をする者が見捨てられたキャンプの灰を見つけたときのように、搔き傷でもひとつあれば、その前にしばらくとどまっていたかったのだ。

このとき自分の推測がことごとく間違っていたことに気づいて、黙って窓

辺を離れたこの説教好きの若者の心に、三本の釘で十字架に釘付けられた神のように、ただひたすら彼らのために血を流す以外、他者の問題に介入することはできないのだ、という実感がようやく少し芽生えたことを、作者は示している。

生活の流れ

事件からまた日が流れ、葡萄の収穫期が近づいた。エリザベートは生活の糸をとり直した。再び軽い発作に襲われたゴルナック氏の病室と葡萄の大桶のある小屋との間を絶えず走り回らなくてはならなかったからだ。小作人のギャルベールがごまかしをやっていないか、日雇いの労働者たちの労働時間の検査も必要だった。ピエールには母親がこれまで通りにもどったように思われた。といっても、彼は彼女の姿をごく稀にしか目にしていなかった。昼間、手伝いを申し出ても、「お前は本を相手にしていればいいんだよ。嘴をいれないでおくれ」と言って、彼を寄せ付けないし、夜は夜で、夕食がすむと母はさっさと自分の部屋に引き上げてしまうからであった。たった一度、夜半に母の寝室の扉の前を通りかかると、中から吐息や啜り泣きの音が聞こえてくるような気がして立ち止まったことがある。だがその夜は雨で、風もひどく吹いていた。外界が悲鳴を上げているとき、人間の泣き声をそこから識別するのは難しい。翌朝、エリザベートの表情が平静で、いつも通りに忙しそうなので、息子は安心した。聞いたのは秋の夜の悲鳴だけだったのだ、と思った。

しかし、母親が仕事に気をとられていることは、彼が進もうとしている自分の天職について彼女に話すことを躊躇させてもいた。つまり司祭職をめざすにせよ、修道院にはいるにせよ、「清貧の誓い」⁴⁾を立てるためには遺産相続を放棄しなくてはならず、母があれほど身をいれて守り続けている土地も葡萄畑も、すべて他人のものになってしまうことに、母が耐えられるとは思えなかったからである。ところが、十月も末近くになって、まだヴェリ

デイスにいるつもりなのか、と彼に尋ねた母親に、自分の考えている別離は、彼女の想像よりもずっと長いものであることを語ったとき、エリザベートの反応は、またしても息子の予測を裏切るものであった。

「それがお前の天職だということを、あたしは一度も疑ったことはないよ」

「じゃあ、賛成してくれるんですね？ 母さん」

「賛成も何も。お前はお前の幸福のために一番良いと思うことをやっているのじゃないの。可哀そうな子だね」

そして彼が遺産相続を放棄する予想を語ると、彼女は言った。

「それがわたしにどうしたっていうの？ そんなものが少しでも大切だと思っているの？」

「だって、ママン、あなたが亡くなられた後では、家も土地も全部売られてしまうですよ。いつもうちのものだったあの松林も、お祖父さんが植えた葡萄畑も……」

「お前でなければ、お前の息子か孫が、それをするまでだよ。何も続くものはありやしない。存在するものはありやしないのさ。」

エリザベートは声を低めて繰り返した。

「何も……何も……何も……」

又しても予想を裏切られた息子は、母の顔をつくづくと眺め、そこに、涙の印でもあれば、と願った。自分は永久に、彼女のもとを離れるのだ、いまはこの地上で二人が同じ屋根の下、この部屋で肩を並べられる最後のときなのだ。この哀れな息子はいつも母親を悩ませて来たし、どれほど母を深く愛しているかを口に出して知らせることもできなかったのだ！

とうとう母親は動かされた。涙がその眼に浮かんだ。そして唇は、この神のほかに誰一人として選んでくれる者のない若者の瘦せた苦痛にゆがんだ顔を求めた。彼女は泣き出した。

しかし、作者のナレーションはこれに続けて、夜ごと彼女が涙を流す相手の、もはやこの世にいない青年をここに呼び出す。「われわれの嘆きはたと

えそれがはじめは他の者によって引き起こされたものであっても、常に同じ坂道を下り、同じ存在に向かって動いて行くものである。」エリザベートはいますすり泣いているが、自分の膝にもたれているのが誰の頭なのか分からなくなっていた。永遠の別離の苦しみが、息子と遠く離れることを苦痛と感じさせるのを妨げていた。彼女は夢のなかでかのように、「わたしの可哀そうな子……、可哀そうな子……」と、そこにはいない誰かに向かって繰り返した。

ピエールは慰められた。そして母とひとつになれたという幸せな確信を抱いて、「聖徒の交わりの祝日（11月1日）」の二、三日後⁵⁾にヴィリデイスを発った。ゴルナック氏は12月に世を去った。嫁の諫めを聞き入れて、司祭を招いたのだった。マリア・ラガーヴは葡萄収穫期の最後になって、葡萄搾り器の中に転げ落ちて大腿骨骨折をしており、ゴルナック氏より二、三週間後に死んだ。オーギュスタン・ラガーヴはマリアが残した家を喜んでエリザベートに貸してくれたので、彼女はその無人の家を訪れては、ボブがいた部屋で、葡萄の枯れ枝を燃やした。しかし間もなく彼女は、ボブがこの部屋の中に残したものを汲み取り尽くしてしまい、後には倦怠しか感じられなくなったのを嘆いた。

彼女の宗教的な習慣が一つずつ復活して行った。彼女の恋は良心の咎めとなり始めた。思い切って公の赦しを得ようと告解をするまでには、ちょっと時間がかかったが、それを聴く聴罪司祭——ヴィリデイスのマリア会の神父だった——が、彼女のことを、理解できない〈人でなし〉と見做さないのには驚いた。

「あなた方はみんな同じですよ」と何度も彼は言った「あなた方のひとりを知れば、全部がわかりますよ」。

彼女は、自分のケースが例外でないということに驚いていた。彼女の恋は、それまで思い込んでいた異常さをすっかり剥ぎ落とされた。神父は、彼女に死んだ青年を思うことを禁じないように気をつけなさい、と言った。た

だし、それは神の前でするように、との条件もつけた。彼女はこうしてボブの思い出を無害化した。それは日ごと彼女が心を砕く様々な思惑の中の一つとなって行った。少しずつ、彼女は自分で生活の流れと呼んでいるものの中に、身を混じり込ませた。葡萄酒の売り上げが悪いと彼女は心配になった。たいへん裕福なくせに、ヴィリディスに〈金をつぎ込まなくてはならない〉のが気になって仕方がなかった。たとえその一部たりとも、世の中の何物をもってしても、売り渡すことは肯んじなかった。土地から上がる収入は所有地を維持するのに十分であったにも拘わらず、「手許不如意でねえ」というのが彼女の口癖だった。彼女には話相手というものがなかった。他人の事柄には全く興味を持つことができず、自分の持ち物について示す細目は他人の関心をまるで引かなかったからである。ヴィリディスやランゴンのお偉方は、年に一度彼女のもとを訪ね、彼女もその訪問のお返しをした。エリザベート・ゴルナックは教区の慈善事業のすべてを自前で援助しているのに、業突張りだという評判が立っていた。

ある朝、ポールがバザスの大地主と結婚するという知らせが届いたが、エリザベートはほとんどそれを読みもせず、粉々に破いて捨てた。憎しみからではなく、麻酔が切れて過去の感情が呼び覚まされるのをおそれてのことだった。

自分が死んだあと、所有地が売却されるという考えは、彼女の執着心を傷つけなかった。おそらく彼女は、ピエールが遺産相続を放棄すると言ったことに、漠然としたある満足感をさえ覚えたのである。彼が外地へ旅立つ前、マルセイユで、春の三日間を息子と母はともに過ごした。会った最初の日、お互い話すことが何もないので、二人は気まずい思いをした。それからは無理に話をせず、別れのことばを交わすまで、平静さを保った。船が出て行ったときは、彼女もさすがに波止場で泣いた。しかしランゴンへ戻る汽車の中では、幸せな気分になった。いまは一年の中でも、大事な仕事が山積みにな

なっているときだから、早く家に帰りたいだったのである。葡萄が花咲く、葡萄が実る、やがて取り入れられる。エリザベートの生活は季節の移り変わりに紛れ込む。雨、雪、霜、太陽は、彼女の財産の増加を助けるか、妨げるか、によって、彼女の味方ともなり、敵ともなった。彼女の肉体は、かなり以前から、どこがどう痛むかによって、季節や天候の変化を教えてくれていた。

脂肪太りが心臓の動きを鈍くしたので、必要以外にはあまりあちこち出掛けなくなった。ギャルベールが彼女をごまかしている、という噂が方々に広まり、無名の手紙が一時心をかき乱したこともあったが、結局何もわからない振りをする方を好んだ。彼女が慈善事業をやっていないかのように、ピエールは金をせびる手紙ばかりよこす、と彼女はこぼした。

ある夏の日、彼女はランゴンのモーベック広場にある一軒の菓子屋の前で馬車から降りた。自動車が一台、その店の前にエンジンをかけたまま停まっていた。上等な身なりの小太りな若い婦人が、四人の子供たちにお菓子を分けてやっていた。ポールだとわかったが、向こうは顔をそむけた。老婦人はタルトをひとつ買って馬車にもどり、墓地へ立ち寄らせた。かつて柩を載せた車が置かれたあのポーチを抜けて、この灰色の郷土くにに、時折碑銘を読みながら、足を踏み入れた。ゴルナック家の死者たちの墓には額づいたが、ラガーヴ青年の遺骸を蔵しているところでは、そうせずに、ただ長いこと、身じろぎもせずに立ち尽くし、墓を凝視していた。墓を囲う鉄柵を塗り直さなくては、と彼女は気づいた。青空に燕が鳴き交わしている。ヴィランドローへ通じる道路を一台の荷車が揺れ動いて行く。製材所の長い悲鳴は寸時も止むことがない。板の山は、この午後の空気に、新鮮な樹脂と鉋屑かんなの香りをただよわせる。塀の向こう側をふたりの女が土地の方言で語り合いながら通る。ヴィリディスのテラスでよく日向ぼっこをしていたような蜥蜴とかげが一匹、ロベール・ラガーヴの名前と生年月日の半分を隠した。いまこの石の群を焦がしているこの夏の日、これまでに幾度となくあったのと同じようなこの夏の日、プリューダン・ゴルナックの妻エリザベートが、彼女に先立って地

に還った全ゴルナック家の家族とともに塵に帰するときにも、照り輝いているかもしれない。はるか彼方から急激な悲哀が押し寄せ、這い登り、彼女を包んだ。ああ！ 自分はまだこれらの亡者たちのように死んではいないのだ。彼女は半ば眼を閉じ、暗くなった、しかし闇にはなりきっていなかったあの寝室を思い浮かべた。ラガーヴ青年は両腕を伸ばし、歯を輝かせ、はだけた胸を見せていた。彼女は錆びついた柵に歩み寄って、その柵に顔をもたせ、底知れぬ暗黒、封じられた柩、敷布の端切れ、細かくなった骨などを想像した。そしてやっと、跪いた。何度も口ずさんだ“深き淵より”の祈祷文⁶⁾は、やがて彼女の苦悩に処方を与え、苦痛を鎮めた。彼女の一部分は、今度こそ落ち着かせられ、動かなくなった。ピエールにあっては「霊」であり「生命」である神は、彼女にとっては麻痺であり眠りなのだった。墓地の門を出たところで、彼女は深呼吸をした。古風なヴィクトリア馬車は彼女を次第に愛する者から引き離して行った。ヴィリディスに向かう坂道で、御者は手綱を引き締め、登りにかかった。そこはいつも子供のころのボブを彼女が思いだす場所だった。小さな濡れた水着を持って、黒葡萄の房から粒を食いちぎりながら帰ってくる幼いボブ、今日も彼女は彼を見た。だが隣の地主たちの葡萄がすっかり病気にやられてしまったのも見て、ヴィリディスがその災難を免れたことを嬉しく思った。どうしてもあと二回、ギャルベールに農薬を撒かせなくてはならない。

エリザベート・ゴルナックは、再び、生活の流れに運び去られるあの亡者のひとりとなったのである。

『宿命』のあらすじ 終わる

注

- 1) シェークスピア『ロミオとジュリエット』第3幕よりのパクリ。
- 2) 同性愛のこと。『宿命』の主要テーマのひとつ。次回詳述の予定。
- 3) 聖シャルル・ド・フーコー (Charles Eugène de Foucaud de Ponbriand 1858-1916) フランス人、カトリック神父。貴族出身で、モロッコ、アルジェリアでのキリスト教の布教と、現地民族の文化調査に多大の功績をあげ、多くの人に慕われながら、暗殺による死をとげた。1920年代のフランス青年層に大きな影響を与えた。2022年5月、現フランシスコ1世教皇により列聖。
- 4) 清貧の誓い：一切の私物を持たないこと。修道3誓願「清貧・貞潔・従順」の筆頭。
- 5) 「聖徒の交わりの祝日 11月1日 万聖節、諸聖人の祝日ともいうカトリックの大祝日」の次の日(11月2日)は「死者の日」と定められ、この数日間は、日本の「お盆」に相当する。
- 6) 「われ深き淵より(デ・プロフンディス)」は旧約聖書『詩編』130に基づく「死者のための祈り」。

(続)

(なかじま・こうこ 元農学部教授)